

紅筆願文

野村胡堂

—

「御免」

少し職業的に落着き払った声、銭形平次はそれを聞くと、脱いでいた肌を入れて、八五郎のガラツ八に目くばせしました。生憎きようは取次に出てくれる、女房のお静がいなかったのです。

「へッ、あの声は臍から出る声だね」

ガラツ八は頸を縮めて、ペロリと舌を出しました。

「無駄を言わずに取次いでくれ」

「当てっこをしましょうや、——年恰好、身分身装」

「馬鹿だなア」

「まず、お国侍くにざむらい、五十前後の浅黄裏あさぎうらかな」

ガラツ八は尤もつともらしく頸くびを捻ひねります。

「誑なまりがないぜ、——それに世馴れた調子だ——まず大家たいけの用人というところかな」

平次もツイ釣られます。

「御免」

もういちど、錆さびのある素晴らしい次低音バリトーンが、奥のひそひそ話を叱しかるように響きました。

「それ、お腹立ちだ。言わないことじゃない」

ガラツ八は月代さかやきを薬指で搔かいて、もういちどペロリと舌を出しながら、入口の方へ飛んで行きます。

「仔細しさいあつて、主人御名前の儀は御免蒙ごめんこうむるが、拙者は石川孫三郎と申す者。平次殿にお願まかいがあつて罷り越した、ほんの一寸逢ちよつとつて頂きたい」

少し横柄おうへいですが、ハキハキと物を運び馴れた調子です。

「お聞きの通りだ、親分、——この賭かけは口惜くやしいが親分の勝さ、四十五六の型へ入れて抜いたような御用人だ。逢いますか、親分」

ガラツ八はモモンガアみたいな手付きをして見せます。

「御武家は苦手だが、折角せつかくこんな所へ来て下さったんだ、とにかくお目に掛かるとしよう。此方こちらへ丁寧にお通し申すんだ」

「お家の重宝おもきりまる友切丸か何か紛失ふんしつしたんだろう、むずかしい顔をしているぜ、親分」

「無駄を言うな」

「へエ——」

ガラッ八はようやく客を導いて来ました。前ぶれ通り、存分に野暮ったい四十五六の武家、羽織の紐を観世縫かんぜよりで括くくって、山の入った袴はかま、折目高の羽織が、少し羊羹色ようかんいろになっていようという、典型的な御用人です。

「これは、高名なる平次殿でござるか。拙者は石川孫三郎と申す、以後御見識り置きを願いたい」

肩肘かたひじを張って、真四角にお辞儀をします。

「へエ、恐れ入ります。私は平次でございます。どうぞ、お手をおあげ下さいまし」

平次はすっかり恐縮きようしゆくしてしまいました。どうも一番あつかい悪い種類にくのお客様です。

「早速ながら、用件を申上げるが、実は平次殿、お家に取りつて容易ならぬ事が起つたのじゃ。何とか力を貸しては下さるまいかの」

武家は折入った姿ですが、平次は何かしら釈然しやくぜんとしないものがあります。

「どのような事か存じませんが、私は町方の御用を承うけたまわっているもので、御歴々

の御屋敷の中に起ったことへは、口をきくわけには参りませんが、へエ」

体ていよく敬遠するつもりでしょう、平次は紙袋を冠かぶった猫の子のように尻ごみ

をして居ります。

「御尤ごもつともせんぼん千万、だが、——平次殿に乗出して頂こうと言うわけではない。ほんの

少しばかり、知恵を拝借すればよいのじゃ」

「へエ——」

「実は御親類筋の安倍丹之丞様から、平次殿のことを承なぞって参ったが、この謎なぞを解くものは、江戸広しと雖いえどもまず平次殿の外にはあるまいと——」（第二卷

「傀儡名臣」参照）

「御冗談で——」

押の強そうな用人に捉つかまって、銭形平次もことごとく降参してしまいました。

二

この勝負はとうとう石川孫三郎の勝でした。平次を口説くどき落すと、

「実はこれじゃ」

懐から取出したのは、小さく畳んで紙入はきに挟んだ小菊が一枚。畳の上にひろげて、平次の前へ押しやるのです。

「これは？」

「見らるる通り、一枚の小菊の中ほどに、紅筆べにふでで書いた、得体の知れない仮名かな文字もじが二十五ある」

「へエ——」

さしのぞ
差覗くまでもありません。女の使う笹紅ささべにを、筆ふくに含ませて書いた文字が二十
五。平次が見てもなかなかの達筆ですが、不思議なことに、最初の一行が『あ
なかしこ』と読めるだけ、あとは、どう読んでも意味が通じません。

その全文を掲げると、

あ	な	か	し	こ
え	の	ち	を	す
ま	い	わ	か	み
た	お	の	と	や
め	ち	ち	に	か

こんな具合になります。

「これが平次殿、お屋敷奥庭おくでらの祠ほら、何様とも判らぬまま、お稲荷いなり様と申ししてい

る社殿の中にあつたのじゃ」

「へエ——」

「それも一度や二度ではない、三度までも」

石川孫三郎も、ゴクリと固唾かたずを呑みます。

「どんな弾はずみで、見付けなすつたんで？」

平次の好奇心もかなり揺ゆすぶられます。

「二百十日の嵐で、お屋敷の廂ひさしも塀へいも、奥庭の祠ほくらもひどく傷いたんだ。あちらこちら手入れをする序ついでに、雨漏あまもりのひどくなった祠ほくらも修繕しゆせんさせようと思うと、正面台の上に、これがキチンとのつていたのじゃ」

「御本尊は？」

「御本尊と言つてはない。祠の中には、御幣ごへいが一本立っている切りだ。その御幣も雨漏りでひどく汚れたが、その御幣の前の台の上に、これが置んだまま置

いてあつたのじゃ」

「汚よごれもせずに」

と平次。

「左様、——多分嵐の後で置いたものであろう。台はまだ乾き切つてはいなかつたが、この紙には何の汚よごれもなかつた」

「へエ——」

「それだけならよい。が、何と申しても不気味な紙片だから、拙者一存の取りはからいで、祠の前で焼すき棄すててしまったが、翌する日の朝、何の気なく覗のぞいて見ると、また同じものが台の上そなに供そなえてある」

「——」

「それも焼き棄すてた、もうこれで大丈夫と思うと、今日——三日目に、またこの小菊が乗のっている」

「誰かに相談しましたか」

「いや、——御主人様は永の御患おんわづらい、若殿様はまだお若い上に、至ってお弱い方じゃ。こんな事を申上げたら、お心持にもお身体にも障さわるかも知れない。三日目の今朝になって、お屋敷にこの春から泊っていらっしやる、御親類の方——
浅井朝丸様あさいあさまるという方に相談申上げ、いろいろ考えたが、何としてもわからぬ。
思案に余って、いつぞや安倍丹之丞様うけたまわから承った平次殿が名前を思い出し、押して参った次第じゃ」

石川孫三郎はそう言つて眉を垂れるのです。押の強そうな頑固がんこな感じのする人間ですが、一徹てつの忠義らしいところが、次第に平次の好感を誘さそいます。
「ところで、この文句を読む見当でもつきましたか」

平次はこの謎の二十五文字に吸付いて、一生懸命考えている様子です。

「いや、一向判らない。浅井朝丸様は、四角な文字も読む方だが、この文句ば

かりは読む工夫くふうはないと言われる。縦から読んでも横から読んでも、斜ななめに読んでも、逆さかきに読んでも読み下せないのじゃ」



「なる程これはむずかしい——ところで、この奥庭の祠とやらへ、外から自由に入りが出来ましようか」

「と申すと」

「よくお屋敷方の内神様で、塀の一箇所に凹みを拵え、外から自由にお詣りの出来るようにしたのを見掛けますが——」

「いや、そんなのではない。塀は嚴重な板塀で、忍び返しまで打ってある、容易に外から入れる場所ではない」

「すると——」

平次はもういちど謎の仮名文字に目を落しました。

「そんな事はありませんが」

石川孫三郎の顔は硬張りしました。何と言おうと、どう誤魔化そうと、この悪戯は、屋敷内に住んでいる者の仕業でなければなりません。

「ところで、この文句を読む見込みはどうしても、立ちませんかね」と平次。

「残念ながら見込みはない。そつと写し取つて、近所の手習の師匠にも見せたが、——もつとも浅井朝丸様は、これは学者や坊主は、読めまい、吉備真備の讀んだ耶馬台やばだいの詩しのようなものだから、安倍仲磨あべのなかまろの蜘蛛くもでも下がってくれなきや——と申される」

「なるほど、耶馬台の詩見たいなものだ、——ところで御用人様、御屋敷に住んでいらつしやる御人数は？」

「殿様は六十五におなり遊ばす、御病気で一年越しお床に就いた切りだ。若殿時之助様は二十五でまだお一人、よく出来た方だがお弱い。奥方はお勇様と仰つしゃつて四十」

「若様とお年が十五しか違いませぬね」

「後添でいらつしやる、若殿様とはま継なしい仲だが、至つてお睦むつましい。奥方には今年十九になる若葉様という、それはそれは綺麗なお嬢様がある」

孫三郎はこの主人の娘がひどく自慢の様子です。

「それから？」

「掛かり人うどの浅井朝丸様、殿様の遠い甥おいご後じゃ、これは二十七歳、文武の心得もある」

「――」

「外に拙者と、お腰元が一人、お松といってこれは十八、仲働が二十六のお宮という忠義者、下女が二人、それに鉄という中ちゅうげん間げんがいる。鉄太郎とか鉄五郎とかいうのであろう、請うけじょう状じょうに名前は書いてある筈だが、二十八になる良い若い者で、鉄、鉄で通っている」

「それだけですな」

「もう一人、門番は宇内うないという老人夫婦、六十を越しているが、恐ろしく達者だ」

「外には、馬が一頭、猫一匹——」

「よく判りました。その御人数の中で、仮名文字をこれだけ綺麗に書けるのは、どなたでしょう」

「左様さよう、——まず腰元のお松と——」

「御嬢様の若葉様と、奥様のお勇様と——」

平次は指を折りました。

「いや、お嬢様や奥様は、このような悪戯いたずらを遊ばす筈はない」

「浅井朝丸様とやらも、書けば書けるのでしよう。若殿時之助様も、御用人のお前様も」

「飛んでもない」

石川孫三郎は大きく手を振ります。

「ところで御用人様」

ひどく改まった平次の顔を、石川孫三郎は不安らしく見上げました。

「この謎の仮名文字を読むと、決して幸しあせなことはございませんが、それでも読みたいと仰あしやるでしょうか」

「？」

「この文字は恐ろしい言葉でございます。これが読めると、御用人様一日も一刻ときも安い心がなくなるばかりでなく、お屋敷の皆様には恐ろしい疑うたがの雲がかかりますが、それでも——」

平次はもうこの謎を解いてしまった様子です。

「そう聞くと、私も迷うが、いずれにしても、そのままには相成るまい。それ

を読まずに焼いてしまつたら、悪戯者いたずらものはまた四枚目を用意するだろう。悪いものなら悪いもののように、書いた者を詮議して、後の崇りたたのないようにするの
が、この石川孫三郎の勤めと申すものであろう」

「いかにも、御尤ごもつとも、——では読み下します、御覧下さい」

「——」

平次の指の先は、小菊の真ん中、五つずつ並べて五行に書いた、三行目の三番目——一番真ん中のわ、という字を指しました。

「御用人様、私の指の動く通りに読んで下さい」

平次の指は紅筆で書いた仮名文字の上を、吉備真備きびのまきびを救った蜘蛛くものように動きます。

「何々、わ、か、と、の、お、い、の、ち、を、す、み、や、か、に、ち、ち、め、た、ま、え、あ、な、か、し、こ」

石川孫三郎の顔は、平次の指を追って読み上げるうちに真つ蒼になりました。後の半分ほどは口の中で^{つぶや}呟くだけで、最後の一句でゴクリと^{かたず}固唾を吞みます。

あ-な-か-し-こ
え-の-ち-を-す
ま-い-わ-か-み
た-お-の-と-や
め-ち-ち-に-か

「御用人様、——若殿お命を速やかに縮め給え、^{あなかしこ}穴賢——と紅筆で^{がんもん}願文を書くような人間は、御屋敷に心当りはありませんか」

「ない」

孫三郎は深々と腕をこまぬいて、^{ふち}畳の縁を^{じつ}凝と見詰めて居ります。

「読んで上げない方がよかつたかも知りませんが、お屋敷にこんな大それた願文を書く人間がいちゃ抛ほうつてはおけません。一度はイヤな思いをなさるつもりで、この書き手を捜し出し、後腐あとくされのないようになさいませ」

平次はこうでも言う外はありません。

「有難う。屋敷の名も申さず、定めし無礼な奴と思うであろうが、何事もお主のため、——この私に免じて許して下さい。さつそく悪者を捜し出し、思い知らせた上、お礼に参まゐるであろう。さらばじゃ、平次殿」

孫三郎は打ち萎しおれて帰って行きました。

「親分、変なことがあるものだね」

ガラツ八は酔っぱい顔をします。

「まだまだうるさい事になるだろうよ」

平次はまだ何か考えている様子です。

三

それから三日。

「御免」

錆のある声さびが少し落着きを失って、また平次の戸口を訪おとずれました。

「親分、来たぜ」

「シッ、丁寧うながに取次ぐんだ」

平次に促うながされて、ガラッ八は石川孫三郎を案内して来ました。

「平次殿、——大変なことに相成った」

典型的な用人が、挨拶も忘れて平次の前にドカリと坐るのです。

「悪戯いたずらもの者が解りましたか」

「それがトンと相解らぬ、いや解つたつもりになつたばかりに、大變なことに相成つたのじゃ」

「――」

「平次殿、この上は隠しても無益なこと、何も彼も打明けて申上げる。実は、拙者の主人と申すのは本郷元町に御屋敷のある、二千五百石取の御旗本、横山よこやま主計様かずえ」

「大方見当は付いて居りました」

「なるほど、さすがは平次殿。主人御名前を隠しおほ了せたと思つたのが拙者の浅あさ墓はかさだ、――それはともかく、あの謎の文句を、立歸つて主人主計様にお目にかけたところ、御病中ながら以ての外の御立腹。若殿時之助様御命を縮めたいと思うものは、当屋敷内に、継ましい奥方お勇様の外にある筈はない――と仰しやる」

「御重態の床から起き上がり、奥様を御呼付け、弓の折れを持つての御折檻ごせつかんじゃ」

平次も驚きました。かりそめに読んでやった謎なぞの言葉が、それ程の騒ぎを起そうとは思わなかつたのです。

「御主人様の御考えも一応はもつともながら、奥様は、御同族の中にも聞えた貞節、二十年この方、手塩にかけてお育て申上げた、若殿時之助様の御寿命ごじゆめいを縮ちぢめたいと思われる筈もない。拙者も必死とお止め申したが、御老体の一徹てつさ、何としてもお心が解けない」

「二日二た晩に及ぶ折檻せつかんの後、奥様には、よくよく思い定さだめたものと相見え、昨夜、——深更しんこう、見事に生害しようがいしてお果てなされた」

「えッ」

平次は水をブツ掛けられた心持でした。

「たった一人の御跡取時之助様の御寿命を呪われ、殿御腹立ちもつとも至極だが、まま継しき仲を疑われて生害して身の潔白けっぱくを示された、奥様の御心中もお悼わしい。今朝からお嬢様若葉様始め、召仕どもの嘆きで、お屋敷の中は滅入めいつたような心持だ。それに、遺書の立派なお言葉に、殿も今さら後悔の御様子で、——何んにも仰しやりはしないが、黙って我慢していられるだけにお気の毒だ」

「——」
平次も何か自分が責められているような心持で、小さくなって聞いておりま
す。

「わけても若葉様わかばさまは、母上様の潔白のため一日一刻も早く、その呪のろいの願文を書いた悪戯者を捜し出し、父上様の御怒りも宥なだめて上げたいと、葬式の仕度もせ

ぬおむずかりようじゃ。如何にも、尤も至極の願い、お嬢様の御心持をお察し申上げると、悪戯者を捜すのが何よりの供養くようじゃ——拙者も包み兼ねて、実はこうこうと、平次殿のことを申上げると、ではその平次殿とやらに、さつそく屋敷へ来て頂くように、お前がお迎えに行つて来いというお言葉じゃ。殿様、若様にも御異存はない、一刻も早く、平次殿が行つてくれなければ、奥方お勇様の御葬おとむらいの仕度したくも相成り兼ねる仕儀じゃ。どうであろう、平次殿」

石川孫三郎は、手を突いてまた真四角にお辞儀じぎをします。

「よく解りました。いかにもお屋敷へ参りましょう」

「それでは、来て下さるか」

「元々私が余計な猿知恵さるぢえを働かせて、あんな謎を解いたから起つたこと、——如何にもお供いたしましたでしょう。悪戯者を取つちめて、キユウキユウ言わせなきや、この平次の心持が納まりません」

「では、平次殿」

「参りましょう。後と言わずに、今、直ぐ」

平次は帯をキュツと締め直すと、羽織を引っかけて、石川孫三郎に従したがいました。

「親分」

後ろからガラツ八の八五郎。

「来るがいい、手が欲しくなるかも知れない。十手なんか要るものか、相手は御大身の旗本屋敷だ」

四

元町の一郭かくを占領した、宏大な横山主計かづえの屋敷。平次とガラツ八は、用人石

川孫三郎に案内されて、裏門からお勝手へ廻り、奉公人達の好奇の眼に迎えられて、奥の主人主計の部屋に通されました。

「平次——と申すか、宜しく頼むぞ。世間へ聞えては、当家の瑕瑾かきんにも相成る、その辺抜かりなく——」

病床に半身を起したのは、頽然たいぜんたる主人です。肝かんの病で久しく寝て居たのが、三日前怒りに任せて奥方を折檻し、引続く心痛つつかに疲れ果てて、物を言うのもおっくうそう。

「かしこ畏まりました」

平次はそう言うより外にありません。孫三郎に目配めくばせされて、早々に引下がると、次は若殿時之助、これは敷居際で黙礼しただけ。

「平次と申すそうだな。宜しく頼みますぞ」

時之助はそれでも優しく声を掛けます。二十五というにしては、ひどく若く

見えるのは、心も身体も弱いせいでしょう。でも何となく清純な聰明な感じがして、平次には好感の持てる青年でした。

お嬢様の若葉には縁側から挨拶しました。小机に凭れて、眼を脹らしておりますが、下膨れの細面が、類のない上品さです。

「お願い申します」

半分は口の中で言う言葉が、千万言の雄弁よりも、少なくとも、平次の後ろからヒョコヒョコとお辞儀をする八五郎には徹した様子です。

「お嬢様、きつとこの平次が、悪戯者を見付けてお目にかけます。——が、一つだけお尋ね申します」

「何など」

「お屋敷で口紅をお使いになるのは、どなたとどなたでございましょう」

「私と、それから松だけ、——母上はお用いになりません」

屹きつとした言葉は、死んだ母の無実を少しでも晴らそうと言うのでしよう。

「皆様御使おつかいの小菊を一枚頂戴いたしとうございます」

「――」

若葉は黙って手筐てばこの中から一と束たばの小菊を取出して、平次の方に押しやりました。

「有難うございました」

一枚取って見ると、謎の文句を書いた紙と全く同じ漉すきです。

「それから、これは私の紅、と、筆」

可愛らしい鏡台の抽斗ひきだしから出した紅皿が二つと、これも可愛らしい紅筆が一本、平次の前にそっと押しやるのでした。紅皿の一つは使いかけですが、筆の穂ほが太く柔やわらかくて、とても、美しい仮名文字かなもじなどを書ける品ではありません。

それから平次は掛かり人うどの浅井朝丸に逢いました。二十七八の髯ひげあと跡の青々とし

た好い男、学問も武芸も相当らしく、わけでも銭形平次の近頃の働きにすっかり夢中になつてゐる様子です。

「御苦勞だな、平次」

「恐れ入ります」

「何か手掛りは見付かったか」

「何んにも解りません」

「紅筆で仮名文字を書いたから、女の仕業しわざと考えるのは少し早合点だな。現げんに叔父上はそれでしくじつたのだ」

浅井朝丸は穿うがつたことを言います。

「御尤ごもつともで」

平次はそれに軽くうなずきました。良い参考になると思つた様子です。

それから腰元のお松にも逢いました。十八というにしては、ませた娘で、可

愛らしくも伶俐りはつでもありますが、持っていた紅皿は、指の跡が沢山あるだけ、紅筆を使った様子も、紅筆などを持っていない様子もありません。

「若殿様をどう思う」

「御慈悲深い方でございます」

何かしら、あこがれを持った眼を、平次がジッと見詰めると、お松は真っ赤になつて差しうつむきました。

仲働のお宮は働くより外のぞみに望も興味もない女。外に下女が二人、年寄の門番夫婦にも逢いましたが、何の変哲もありません。

「もう一人、中間ちゅうげんの鉄てつがおります」

「なるほど」

平次は孫三郎に案内されて、中間部屋に入つて行きました。

「鉄はちょうどいないようだが」

「中を見ても構わないでしょうな」

「構わないとも」

孫三郎のうなずくを見ると、平次は中間部屋に入って行きました。三畳の隅っこに、蜜柑箱みかんが一つ、行燈あんどんが一つ、蜜柑箱は机の代りになるらしく、その上すずりばこに硯箱すずりばこが置いてあって、箱の中には、手習をした塵紙ちりがみが二十枚ばかり重ねてあります。取上げて見ると、何か往来物おうらいものを習っている様子、下手へたは下手ながら、一生懸命さが溢あふれているのも不思議です。

「余よっ程ほど心掛こころがけの良い男ですね」

「渡り中間には珍しい男だ」

「どれどれどんな物を持っているか」

三尺の押入を開けると、上は夜の物、下は竹行李たけごうりが一つ、蓋ふたをあけると、中から着替えが二三枚と、新しい手拭と三尺と、塵紙ちりがみが少々、それに小銭の少し

入った財布と、紙の包みが一つあります。

中を開けて見ると、

「あッ」

三人声を合せたのも無理はありません。紙包みの中から出て来たのは、真新しい天群上で包んだ紅皿が一つ、赤い半襟はんえりがひと掛けです。

「この野郎だッ」

わめく八五郎。

「待て待て、紅皿は真新しい、買ったばかりで手が付いていない、——それに半襟だけは余計だ」

平次は落着払ってその下を見ると、底の方へ押込むように入れてあるのは、一口の匕首ひとふり、抜いて見ると、思いの外の凄い道具です。

ちようどその時、中間の鉄がノソリと帰って来ました。一と目様子を見て取

ると、

「何をしやがる、——誰に断つて人の物に手を掛けるんだ」

平次の襟髪へ手を掛けます。

「野郎ッ、御用だぞッ」

ガラッ八はその後ろから飛付きました。

「何をッ」

振り返った鉄の拳こぶしが、思い切りガラッ八の頬ほおに鳴ります。

「神妙にせい、御用だぞッ」

猛然と掴つかみかかる八五郎、二人は一瞬動物のように争あらしいました。が、とうとう八五郎が勝つて、鉄を膝の下にギュッと引据えます。

黙ってそれを見ている平次。

「親分、縄を、縄を」

ハネ返そうとする鉄を押えて、ガラツ八は必死と争いつづけるのです。

「もういい、縛らなくなつて、話は解るだろう、——鉄とか言つたな、——お前の留守に押入を見て悪かつたが、御主人のお許しがあつたんだ」

「——」

ガラツ八の手を離れると、鉄はプリプリしながら起き上がりました。二十七八の丈夫そうな男ですが、渡り中間のすれっからしなところがなくて、なかなか良い印象いんしやうを与えます。

「お前に少し訊きたいことがある——この紅と半襟は何のために持っている」
平次の調子は静かですが、いや応言わさぬ強さがあります。

「紅や半襟を、折助おりすけや中間が持つていちゃ悪いのかえ、——夜鷹よたかや白首にやるんじゃねえ、十六になる妹に持つて行つてやるつもりで買つて置いたんだ」

「それは良い心掛けだ、——あいくち七首は？」

「そいつは男の魂だ。万一の時の用意に持つていちゃ悪いか」

鉄は事毎に逆ねじを喰わせませす。

「よしよし、それもお前の言うのを本当にしよう。ところで、お前は何か隠していることがあるようだ。町方の手で調べて解らぬことはないが、そんな事をして、身分素姓が知れると、お前の請人が飛んだ迷惑をするよ」

「お前も聞いた筈だ、昨夜このお屋敷の奥方が亡くなられたが——それは悪者の悪戯から起ったことだ。詳しく言えば、紅筆で書いた願文から起ったことだ、

——その願文を書いた奴は、下手人も同様だが——お前はその疑いを受けている。その紅皿の貫い手をつれて来て、お前と突き合わせるまでは、許すわけにいかないよ——」

「お前の身許を洗って見ようか、それともここで言ってしまうか、どうだ、鉄」

仲間の鉄は黙りこくって下ばかり見詰めて居ります。深沈たる顔色です。

「八、この野郎は容易に口を割るめえ。請人を捜して、うんと絞ってみろ。どうせ所名前も偽にせだろう。本当の素姓が判ったら、親も女房子も皆な縛り上げて来い」

平次は峻烈しゅんれつでした。

「よし、言うよ、皆んなブチまけるよ」

鉄は頭を上げました。

「紅筆の願文を書いたのはお前か」

石川孫三郎は掴つかみかかりそうでした。

「違ちがうよ、御用人、そんな腐くさった女のような事をするものか。俺は如何にも、

横山一家に怨うらみがある。わけても若殿の時之助には、足を一本叩き折って、肥だめへ投り込みたいほどの怨みがある」

「黙れッ」

孫三郎は我慢がなり兼ねました。

「俺の母親が、ちようどそんな眼に逢ったんだ。やい、味噌摺みそすり用人奴、よつく聞きやがれ」

鉄は言うのでした。——今から三年前、若殿時之助がまだ丈夫で元氣だった頃、甲州街道を遠乗りして、笹塚ささづかで百姓女を一人蹄ひづめにかけて大怪我をさせたことがありました。女が高荷を背負っていたために、馬が驚いて狂奔きようほんしたというのを理由に、気の立っていた時之助は、怪我をして肥だめに落ちた女を見捨て、そのまま屋敷へ引揚げて来たのです。

女は鉄の母親でした。足を折った上、馬に蹴けられた場所が悪かったか、その

まま床に就いて枕もあがらず、あまりの事に、人を頼んで横山家に掛け合いました。が、剣もほろろの挨拶で、相手にもしてくれません。

鉄は多血性男子でした。母の看護を小さい妹に任せ、江戸へ出て転々奉公しているうち、縁があつて、素姓を隠したまま、横山家の中間部屋に入り込んだのです。

「あわよくば殿様の前へ出て、思い切り啖呵たんかを切るか、若殿をもういちど馬に乗つけて、足の一本も折ってやろうと思つたのさ。殿様は御病氣、若殿も馬に乗る様子もねえ。いい加減あきらに諦めてオン出おんてやろうと思つている矢先だ、妹へ紅や半襟を買つたのは、久しぶりで笹塚ささづかへ帰る土産みやげだよ。解とつたか、味噌みそ摺すり奴、——手前は腹の悪い人間じゃねえが、主人大事こが嵩こじて、外の者へツラく当り過ぎるよ、気を付けやがれ」

石川孫三郎も一句もありません。

「紅筆の何とかを書いて、人に嫌がらせをするような、そんなケチな野郎じゃねえ。見損ないやがったか」

鉄は土間に大胡坐おおあぐらをかいて、精いつぱいの啖呵たんかを切るのです。

「よしよし解った。が、そう解った上はこの屋敷へおくわけに行かねえ、俺と一緒に来い」

平次は静かに鉄の肩を叩きます。

「あ、何処へでも行くよ。憚りはばかながら岡っ引こわを怖がるような、そんな悪い事をした覚えはねえ」

立ち上がる鉄。平次はガラッ八を招くと、何やらささやいて、鉄をつれて自分の家へ帰しました。

「御用人様、奥庭の祠ほこらを見せて下さいませんか」

「いいとも」

石川孫三郎はホツとした顔で先に立ちます。

奥庭の祠には何の変ったこともありません。白い幣ぬさを立てた、三尺四方ほどの堂と、賽銭箱と、鈴と、それに赤い小さい鳥居と。

「紅筆の願文は、嵐あらしの後で、堂を修復する話があつてから、見付かったのですね」

「その通りだ」

と孫三郎。

「その時堂の中は湿ぬれていたと言いましたね」

「最初のは、まだ乾き切らない台の上にのせてあつた」

「有難うございました。それじゃまた明日の朝参ります、——皆んなへ、私がもういちど来ることを言っておいて下さい」

平次は変なことを言つて歸つて行きます。

五

その晩平次は、中間の鉄をなだめなだめ、いろいろの事を訊き出しました。最初はプリプリしていた鉄も、平次の心持が解ると次第に打解けて、晩酌を附合いながら、滑らかに話すようになっていたのです。

その話の筋を纏めると、腰元のお松は若殿の時之助と親しく、一しきりは目に余ることもありましたが、身分の隔てがあるのと、母親のお勇が厳しいので、二人は次第に遠ざかつて行くらしく、お松に暇を出すと言つた、一時の噂も立消えになっているということでした。

もう一つは掛り人の浅井朝丸で、これは文字もあり、腕もよく、一かどの人

間には違いありませんが、少し道楽が過ぎるので、お勇には受けが悪く、一時は若葉を妻に申受けて、浅井家を興おこそうという話もあったようですが、いつの間にもやらそれも沙汰さた止やみになったということですよ。

「紅筆の願文を書くとする、お松か、浅井朝丸のうちと言うことになるな。明日は多分判るだろう」

平次は何やら成算があるらしく、四方山よもやまの話に更ふかしてその晩は寝てしまいました。

翌る朝、ガラツ八と一緒に横山家へ行った平次。

「きょうは御家来衆奉公人をはじめ、お屋敷の皆さまの荷物を調べさせていただきます」

始めからこう言った振れ込みで、まず用人石川孫三郎の荷物をしらべ、掛り人浅井朝丸の手廻りの品を調べました。

石川孫三郎の荷物には、何にもあるわけがなく、浅井朝丸の部屋にも怪しいものは一つもありません。この人はかなりのインテリらしく、むずかしい本が幾十冊と、机の上には、よい紙、よい墨、よい筆、よい硯すずりなどを取揃えてあります。

次は腰元のお松の部屋。

ここで平次は大変なものを見付けました。小さい手筐てばこの中にいつぞや平次に見せた紅皿の外に、もう一つ使いかけの紅皿があつて、それには指でなく、筆の跡があり、その紅を使ったらしい軸じくの短い紅筆までが添えてあるではありませんか。

「これは？」

平次はお松の面前に突き付けました。

「あッ、——私は、私は何んにも存じません」

お松は青くなって立ち竦すくみます。後ろからは虎視眈こしたんたん々たるガラツ八の眼。

紅皿は半分以上剥はげて、筆はかなり上等の細筆、軸じくは半分ほどのところから切つて捨ててありますが、穂ほの根の方が薄黒くて、元は墨に使つた筆を、洗つて紅筆べにふでにした様子です。

「お前のではないと言うのか」

「何んにも知りません。今朝まで此処にそんなものは入っていないなかつたんです」
あまりの事に、お松は立上がる力もなく、畳の上にへたへたと崩折れて、恐怖きょうふに見開いた眼が紅皿に吸い付いております。

「親分」

八五郎は後ろから、この娘の肩へ手を掛けそうにしました。

「待て、八」

平次は紅筆の穂を散らして、鼻の先へ持つて来てちよつと嗅ぎましたが、

「この人じゃない」

大きくかぶりを振るのです。

「親分」

四方あたりをねめ廻す八五郎。

「極ごくく良い唐墨とうぼくを使っている人間の仕業しわざだ、——それッ」

指した縁側には浅井朝丸が眼を光らせているのでした。

「野郎ッ」

飛付く八五郎。

「無礼者ッ」

一閃せん、危せうく身をかわした八五郎は、浅井朝丸の二度目の襲撃を除よける暇も

ありません。

「あッ」

縁側から足を踏み外して、もんどり打って庭へ落ちるのを、浴びせて一と太刀。

が、それは平次の投げ銭に封じられました。

「えーッ」

肘へ一つ、頬へ一つ、ひるむところを、飛込んだ平次は、猛烈に体当りを一つくると、浅井朝丸の身体は朽木の如く庭へ落ちます。

「待ってました」

飛付いた八五郎、こんどは用意の縄でキリキリと縛り上げてしまいました。

×

×

「親分、変な野郎がいるもんだね」

帰り途、ガラッ八は平次の説明を誘いました。

「あれは本当の悪党さ、——自分で謎の呪文を書いておきながら、用人に、耶

馬台ばだいの詩しみたいだ——つて言ったそうだ。誰かに読んで貰もらわなきや困こるが、自分で読よんじや拙ますかったのさ。幸さいい俺おれは、辻つじ講こう釈しやくで聴きいて、吉備きび真備まきびが蜘蛛くもに教おしわつて、耶馬台やまだいの詩しを真まん中ちゆうの一字いちじから——東海とうかい姫き氏の国くに——と渦卷うずまき形かたちに読よんだと知しつていたから読よめたのさ」

「じゃ始めからあの居候いこう野郎やらうが怪あやしいと睨にらんだんですか」

「そうでもない、一時はてつきり鉄てつの仕業しごふと思おもつたよ。でもきのうの様子ようすで鉄てつでないでないと解とつた、——そこで、用人よにんに言いつて前触まへふれしておいて、きよう荷物にものしらべをしたのは、悪者あくものの細工こまかを見るためためさ。それが凶星きんせいに当あつて、紅皿べにざしと筆ふでをお松おまつの手筐てぼこに入いれたのは、罫わなに掛かつたようようなものだ」

「——」

「わざと筆ふでの軸じくの銘めいを切きつて、善よい筆ふでか悪わるい筆ふでか解と解とらないようにしたが、上等じやうとうの唐墨とうぼくを洗あい落おすのが、少すこしぞんざいざいだった」

「何だって新しい筆を使わなかったんでしょ」とガラッ八。

「字でも書こうという程のものは、妙に筆を惜おしがるものだよ。使い古した筆を洗ってごま化したのが間違いさ」

「それで市が栄えるわけだね、親分」

「横山家では無事に葬とむらいを出せるだろうし、鉄の野郎には三十両のお手当を貰って来たから、俺の仕事は済んだようなものだ」

平次はそう言って、懐に呑んだ三十両の小判にさわって見るのでした。これで鉄は笹塚ささづかへ帰って、母親の養生も存分に出来るというものでしょう。

「あの娘は綺麗だね、親分」

「だが、可哀想だよ、一番気の毒なのはあの若葉わかばとかいう娘さ」

平次は暗然あんぜんとしました。本当に妙な事件です。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵—萩 柚月

初出—「錢形平次捕物百話」第九卷 中央公論社 昭和十四年八月五日発行

底本—「錢形平次捕物全集」第五卷 河出書房 昭和三十一年七月十五日初版

編集・発行 銭形俱樂部

紅筆願文



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>